

# 茶の湯文化学会会報 No.87

第87号 / 2015年12月22日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

濠で囲われた遠山邸は、南側に正門としての長屋門を持ち、西側に裏門を設ける。茶席の客はこの裏門から入る設計で、正面には庭園へと続く中門、左手に本邸西棟に続く通路があり、そして右手に寄付きの玄関を見ることになる。寄付きの引戸を開くと、沓脱石の上に扁額が掛かる。これは「玉兔」の二文字を隷書で書いたもので、遠山記念館に所蔵されている。松平不昧の書から起されている。寄付きの間取りは三畳台目で、半畳の蹴込床と、丸炬を備えた構成である。壁は「墨

遠山邸は、南側に正門としての長屋門を持ち、西側に裏門を設ける。茶席の客はこの裏門から入る設計で、正面には庭園へと続く中門、左手に本邸西棟に続く通路があり、そして右手に寄付きの玄関を見ることになる。寄付きの引戸を開くと、沓脱石の上に扁額が掛かる。これは「玉兔」の二文字を隷書で書いたもので、遠山記念館に所蔵されている。松平不昧の書から起されている。寄付きの間取りは三畳台目で、半畳の蹴込床と、丸炬を備えた構成である。壁は「墨

遠山記念館の茶室について  
依田 徹



遠山記念館 茶室の外観

差天王寺」と呼ばれる左官技法を用いており、赤味を帯びた土壁に黒いさび文様が浮かぶという、特徴的なものとなっている。  
寄付きから出ると、本邸西棟の数寄屋に続く通路と、茶室に向う「露路」に道が分かれる。この露路は生け垣によって庭園全体から仕切られており、庭園の西区画に、独立した茶庭を構成する。一本道を茶室に向うと、途中に雪隠、腰掛待合があり、延段を通過して茶室に到達する。茶室の外観は茅葺き屋根。切妻を二つ繋

げT字に造り、その下の庇部分を銅板と瓦で葺いている。現在まで茶室に名前が付けられておらず、額は懸っていない。また貴人口はなく、躰口のみである。

躰口前の躰口には、織部燈籠が附属している。周知のとおり、織部燈籠については、竿の観音像を隠れキリシタンが聖母マリアに見立てて信仰していたという伝説がある。遠山家がクリスチャンであるため、あえて織部燈籠を選んだのかもしれない。

躰口から入ると、深三畳に近い空間に、中板と一畳の点前座が付くという、京間四畳中板の間取りとなる。管見の限り類例の無い間取りで、比較的近いものが、大徳寺玉林院にある三畳中板の「蓑庵」だろうか。中板という草体の空間であるが、「蓑庵」よりさらに一畳分を増やし、点前座の袖壁を取り払ったことにより、解放感のある空間となっている。

客座には窓が三つ開けられ、いずれも大きめで、明るい採光である。壁は寄付きと同じ「墨差天王寺」で、深い黒色の模様が浮かび上がることで、部屋全体にモダンな感覚をもたらしている。床の間は躰口正面に配する下座床で、台目寸法で畳敷きとする。床柱は絞りの档材で、「墨差天王寺」の壁と相まって、

垂直線を強調する効果をもたらしている。床の間の壁には、下地の墨蹟窓が開けられており、この点も「蓑庵」とは異なっている。

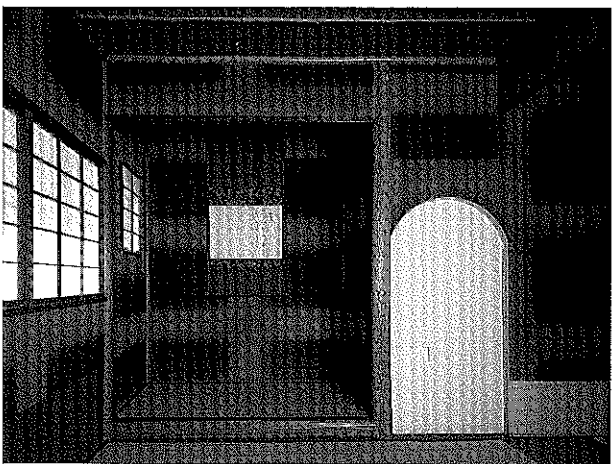
点前座は風炉先に下地窓を開け、正中に一重の釣棚を付ける。これは裏千家利休御祖堂の「蛤棚(仙叟好み)」に近い意匠で、棚の形を州浜形にアレンジしている。この釣棚の裏面には、亀山宗月による次の墨書があり、実質的に作者のサインとなっている。

「泣露千般草／吟風一様松／節録

宗月(花押)

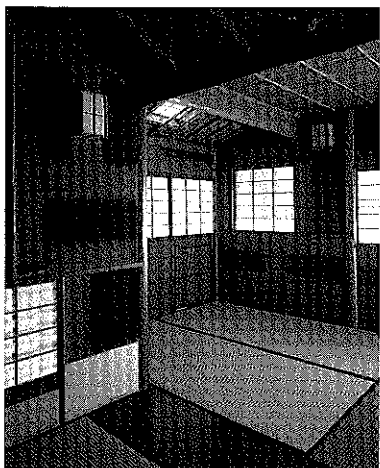
歌は寒山の作と伝わるもので、人里離れた、山奥の情景を詠んだものである。

天井は三種を併用、客座は化粧屋根裏天井と平天井を接続する掛込みで、さらに点前座のみを舟底天井とする。中村利則氏にうかがったところ、この天井の構成は、裏千家の「寒雲亭」のオマージュではないかとの指摘を受けた。釣棚の意匠と共に、裏千家色の強い部分となる。また化粧屋根裏天井には、突き上げ窓があり、春先にここを開放すると、露地の梅の花が見えるようにしてある。これは遠山邸がかつて「梅屋敷」と呼ばれていたため、席中からも梅を眺められるようにする配慮と考えられている。



床の間と「墨差天王寺」の壁

千家流の亀山宗月であった。宗月は明治十一年(一八七八)に大阪の材木商の家に生まれ、二十一歳の時に裏千家十二世又妙斎に師事した。又妙斎は当時、長男である圓能斎に家元を譲って隠居しており、大阪などで独自に流儀の拡大を図っていたとされる。四年後の同三十六年に宗月は皆伝を許され、東京へと移住。稽古場を設け、裏千家流の師範として活動する傍ら、茶室、庭園の造作と美術品鑑定をしていた。建築としては、村井銀行頭取の村井吉兵衛邸、日産会長の山田敬亮邸、高島屋社長の大村彦太郎邸などを手掛けている。また永田町の九鬼男爵邸を手掛けたとされるが、これは岡倉覚三(天心)の上司で、文部省に大きな影響力を持っていた九鬼隆一(成



点前座より躰口を見る

海)である。九鬼は圓能斎の妻・黙庵宗綱と縁戚関係を持っており、この縁からの依頼かもしれない。

これらの建築物は、大部分が関東大震災と、戦災で焼失してしまっている。現存する遺構としては、三鷹市に作られた山田敬亮邸「泰山荘」がある。田舎屋と書院などは戦災で焼失したものの六棟が残り、戦後に国際基督教大学(ICU)の敷地となって、現在も同大が管理している。また村井吉兵衛邸は戦後解体されるものの、「弘仁亭」「無事庵」「閑中庵」などの茶室が根津美術館に移築されている。

宗月は、進取の気風の強い宗匠であった。昭和二年から三年にかけては、東京放送局(現・NHK)の招聘で連続十八回のラジオ講座を担当。さらに写真入りのテキストブック『茶の作法』(昭和三年、有精堂書店)も刊行している。また同六年には電熱機を立礼式の棚に仕込み、華族会館で披露している。これは高橋箒庵も興味を持ち、宗月に頼んで拝見した内容が、「電気茶の湯」(昭和茶道記所収)に見えている。裏千家の刊行していた『茶道月報』にも、しばしば茶会の様子が見えており、社会への露出が多い宗匠であった。

床の間の隣の給仕口は火灯口に作り、その奥には目隠しに壁が自立している。その上面は家の名前にちなみ、遠山の意匠が透かし彫りにされている。底面にも透かしがあり、反射光を取り入れる、採光の機能を持っている。同じく給仕口に接続する形で水屋棚が備え付けられており、化粧にくす玉の彩色画が描かれているのが異色である。

さて、この茶室の設計を担当したのが、裏

遠山邸茶室の特徴となる、袖壁の無い四畳中板という間取りは、侘び茶の空間としては、極めて広い空間である。また席中には客座と点前座、それに床の間の内側に、電球を使った照明がある。茶事の運行の邪魔にならないように配されており、照明器具の使い方がこなれている。さらに水屋には二つの水場と三つの火炉を備える点も、利便性が高い。こうした遠山記念館茶室の特徴は、近代茶道の需要を反映したものといえるだろう。



平成二十七年第二回理事會が、九月二十三日(水・祝)午後二時より同志社大学徳照館一階會議室において行われた。理事十八名が出席し、会長挨拶の後、田中副会長の司會進行で各議題を論じた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、平成二十八年大会について
- 三、無形文化遺産化について
- 四、会誌・会報について
- 五、その他

第一議題では各地例会について、出席の担当理事よりそれぞれ報告が行われた。

第二議題の平成二十八年大会については、平成二十七年六月十一日(土)・十二日(日)に名古屋において開催することが提案され、これを受け、神谷理事より茶会・見学会を含めた総会・大会の実施計画案が出され、承認された。

大会シンポジウムの内容については、テーマを「茶道具研究の最前線」とし、大会担当理事が大会運営委員として提題者への出演交渉などを行うほか、理事会を開かずにも概要を決定して大会運営を円滑ならしめるため、大会運営委員の設置が会長より発議され、一同了承した。

大会運営委員のメンバーは会長、副会長と大会開催地の理事が担当することとし、平成二十八年度は熊倉、田中、竹内、中村(利)、神谷、佐藤が担当する。

公募の大会発表としては、三件を予定することにし、大会発表者の募集については、二月末日を申込締切として、会報(十二月発行)ならびに学会ホームページ(理事会終了後遅滞なく反映)で実施することが決まった。

第三議題については、中村副会長より無形

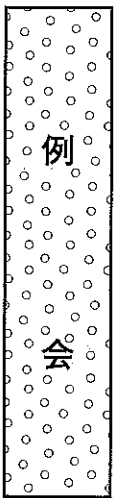
文化遺産として申請するには、ジャンルを選定する必要があることなどが報告された。

これを受け、現在、茶の湯は法律の上で国が保護をしているという条文がなく、唯一、議員立法の文化芸術振興基本法の生活文化の中に、カッコ書きで茶道が含まれている程度であること。茶道を文化財保護法の無形文化遺産の中に含めるためには、文化財保護法の無形文化財の中に「生活文化」というジャンルを新たに設け、そこに茶道を含めるよう働きかける必要があり、それと同時に、文化財として指定を受けるためには、無形文化技術保存者として団体もしくは個人を国が指定する必要があるもので、その際の土台づくりも同時進行で進めていく必要があることなどが熊倉会長より説明され、そのためにはどうするか、どういった活動を行う必要があるのかを、再度ワーキンググループで考えてほしいと要望が出された。

第四議題では、会誌については美濃部理事から二十四号が九月末に発行され、十月上旬に発送予定であること、二十五号は三月発行予定であることなどが報告された。

会報については、池田理事より報告が行われ、年四回発行の会報に各地例会の開催案内

については事務局でとりまとめて、会長に報告することが決まった。



### 東京例会

(平成二十七年九月五日)

「コレクター根津嘉一郎の面目―『青山賞玩』の世界―」

齋藤 康彦

根津嘉一郎は、明治三十九年平瀬亀之助家人礼会で、藤田伝三郎と争い「花白河蒔絵硯箱」を落札したが、同年の「帝国金満家一覽鑑」で根津の年収七〇万円は、六百万円の藤田と差があった。同四四年には藤田と「交趾大亀香合」も争う。枕頭で九万円となったが、藤田は使用せず没する。馬越恭平とは昭和四年の島津忠重公爵家人礼会で「松屋肩衝茶入」を争った。現在の価額で二億二千万円に相当する一二万九千円を入れ、四千万の差で落札した。

藤原銀次郎は根津には目がないという。昭和八年の入札で滝精一が偽物としたので価格は急落し根津は半値で落札した。「観瀑図」

が漏れなく掲載できるよう、会報の発行時期も考慮に入れながら例会計画を早めに立て、会報担当理事もしくは事務局へ知らせてもらおうよう要望が出された。

第五議題では、学会ホームページの役員一覽に幹事も掲載されているが、会則に規定されている役員に幹事は含まれないことから、掲載ページの名称を「役員等一覽」とし、罫線を入れるなどして役員と幹事を区別して掲載するよう提案があり、承認された。

幹事の仕事内容の整理や、学会運営の年間スケジュール作成なども提案され、この件に



大坂府堺市堺区宿院町に開館した「さかい利晶の杜(正式名称・堺市立歴史文化にぎわいプラザ)」について、施設内にある千利休茶の湯館(千利休を紹介する常設展示室)を中心に紹介した。

当施設には千利休茶の湯館のほか、堺出身の歌人・与謝野晶子を顕彰する与謝野晶子記念館(常設展示室)をはじめ、年に数回の企画展開催を予定している企画展示室、堺の歴史や観光情報を発信する観光案内展示室(無料ゾーン)が整備されている。

千利休茶の湯館の展示では、堺のまちを描いた最古の屏風とされる「住吉祭礼図屏風」(堺市博物館蔵)をタッチパネルで検索できるようにするなど、デジタルコンテンツを積極的に取り入れた。常設展示であることから複製資料が大部分を占めているが、実物資料としては、堺のまち(堺環濠都市遺跡)から出土した貿易陶磁や茶道具類などを、適宜入れ替えながら展示しているところである。

また、施設内には各種茶室も設けられている。待庵創建当初の姿を想定して復元された「さかい待庵」では、当館スタッフが案内する見学ツアーを実施(要予約)。三つの茶室(広間)には表千家・裏千家・武者小路千家の御

### 近畿例会

(平成二十七年九月十二日)

「さかい利晶の杜について―千利休茶の湯館を中心に―」

伊住禮次朗

今回の発表では、平成二十七年三月二十日、

家元からそれぞれ軒号を賜り、扁額を御揮毫いただいた。「茶の湯体験施設」として広間で茶の湯体験事業や、三千家の持ち回りによる立礼席での呈茶(有料)をおこなっている。

### 東海例会

(平成二十七年九月十九日)

### 「江戸時代の女性の茶の湯」

谷村 玲子

江戸時代を通じて、女性の名を記した茶会記は稀少である。大名家でさえ、女性の参会は家族間の奥向きの会に限られる。そこで発表では、江戸時代の女性向刊行本から、女性の茶の湯(稽古)の変遷を考察した。

女性の茶の湯にふれた最も早い例は、万治三年(一六六〇)出版の『女諸礼集』だが、巻七「官仕えの心構え」に台天目の運び方を記すのみである。元禄五年(一六九二)『女重宝記』と翌年出版された『男重宝記』の内容の違いからも、江戸時代の前半は、明らかに茶の湯は男性の芸能であったと言えよう。

しかし一八世紀半ば宝暦の頃になると、刊行本でも女性に「たしなみ」として薄茶点前稽古を奨励するようになる。特に「官仕え(武家屋敷敷女中奉公)」をする際には、薄茶点前

や道具の扱いを知る娘は好まれるとある。江戸近郊では町人や豊かな農民層も、娘を大名や旗本屋敷に奥女中奉公させることを望んだ。奉公で娘は高位の武家文化を学び、奉公の履歴はその後の結婚のプラスとなった。

文化・文政期を経て茶の湯は広まるが、幕末の刊行本には、女性の間でも茶の湯が「流行」とあり、錦絵にも茶会を楽しむ女性が描かれるようになる。武家奉公を題材とした「娘諸芸出世双六」でも、手習や三味線音曲より上の盤上に茶の湯がある。本来は武家文化の内にあつた女性の茶の湯が、幕末に好ましい女性の教養と認識されるようになる要因の一つに、女性の武家奥女中奉公があつたのではないだろうか。

(平成二十七年十一月二十一日)

### 「茶の湯と中国漆器」

福島 修

中国式の禅宗を日本へもたらすため日本僧が留学に赴き、一方で日本からの招きに応じて宋・元の高僧が来朝するという日中の盛んな往来は、鎌倉時代の精神と文化の主要な部分を形成していく。「堆朱」や「犀皮」など唐物漆器の分類名称もこの頃から使用される

ナルコ、口也、黒ハ古キコ、口也」(宗湛日記)はこうした内赤ノ盆について述べた言葉である点に注意が必要である。

分類名称のうち、最もわかりにくいものの一つとして「存星」が挙げられる。現在は墳漆作品を指すことが多いが、もともとは布目地の彫彩漆を呼ぶ名称であつたらしい。時とともに日本へ流入する作品の種類も変化し、また茶の湯を楽しむ階層も広がりを見せた。稀少な唐物漆器を語る言葉は、そうした背景を考慮した上で、どのような作品を指したのか慎重に吟味する必要があるだろう。

### 例会のご案内

#### 東京例会

一月三十日(土) 午後二時

(会場: 東洋英和女学院)

「十六世紀から十七世紀にかけての茶碗に ついて」

砂澤 祐子氏

「布袋の仕覆について」

吉岡 明美氏

#### 北陸例会

三月十九日(土) 午後二時

「未定」

(会場: 未定)

#### 金沢例会

二月二十一日(日) 午前九時半～十二時半

(会場: 未定)

「北野大茶会から(仮)」ほか

#### 高知例会

二月七日(日) 午前十時～正午

(会場: 高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「未定」

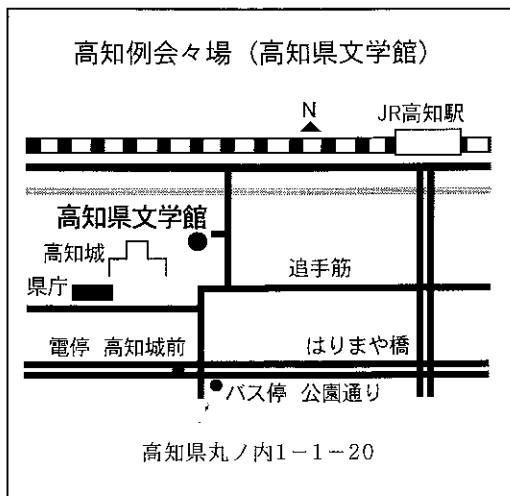
発表者: 永吉 溪滋

茶席 茶の湯文化学会の研究成果を实践する。茶の湯を一般の方々に親しんでもらうため「床飾り」「道具立て」はするが、お点前はお客次第として楽しめる茶席を設ける。

開催予定日 高知新聞「こみゅっと」

に掲示

時 間 午前十時～午後四時まで  
場 所 高知県立文学館慶雲庵茶室  
会 費 三百円



ようになり、室町時代には「君台観左右帳記」において唐物漆器各種の分類基準が記された。しかしその基準は中国におけるそれはズレがあり、日本独自と思われる名称も存在する。

茶の湯に採り込まれた唐物漆器の中は翻案され、新しい名称を獲得したものもある。たとえば名物記などに登場する「内赤ノ盆」は外側面に牡丹や山梔子の花を彫った堆朱の類であり、内面を無文の朱漆塗として茶入盆に用いるが、本来は内面にも彫物があつたと見られる。おそらく、日本で塗り直したのである。利休の言葉として引用される「赤ハ雜



平成二十八年年度  
大会発表者募集

平成二十八年年度大会の研究発表者を募集します。

発表を希望される方は、八〇〇字程度の要旨を添えて、学会事務局まで、メールもしくは郵送でご応募下さい。

大会終了後、発表内容をベースとして論文にまとめ、会誌「茶の湯文化学」に投稿していただけるような発表をお待ちしております。

開催日程…平成二十八年六月十一日(土)  
                  十二日(日)

\*大会は十二日を計画していますが、会場の事情により十一日に変更になる可能性があります。

開催地…名古屋

応募資格…茶の湯文化学会会員であること

募集締切…平成二十八年二月末日

発表時間…一人発表三十分 質疑応答十分

・メールでの応募の場合は、件名を「平成

28年度大会発表応募」としてください。

・応募の際は連絡先のほか、現在の所属先／肩書きなどもあれば、あわせてお知らせください。

・応募者多数の場合は、審査の上決定いたします。

・その他、なにかご質問等ございましたら、学会事務局までお問い合わせください。



【近畿例会発表者募集】

近畿例会において研究発表を希望される方は、八〇〇字程度の要旨添えてメールもしくは郵送にて事務局までお申込みください。応募者多数の場合は、審査の上決定いたします。詳しくは学会事務局までお問い合わせください。

※年会費未納の方は、同封しました払い込み用紙にて至急お払い込みください  
ようよろしくお願いいたします。

